

心理劇と子どもたち

—遅れる子との心理劇—

北原 歌子

はじめに

「幼児の教育」編集部から「特殊幼児の保育」について執筆の依頼を受けたのは、「心理劇・社会劇国際会議」が終わった直後のことである。(会議の経過については会議参加報告参照)

「教育と心理劇」の領域では、「心理劇と子ども」のセッションが、五つもたれた。「子どもとの心理劇——幼稚園児(鷺谷さくら幼稚園児)五十名とリーダー・チーム(大戸美也子・梅村和子・小林栄子他)」「サイコドラマと子どもたち」——A・C・フランスワ(オランダ)「肢体不自由児とサイコドラマ」——吉川晴美・柴田由美子・佐野信子他「ミュージック・セラピー」——山松質文「遅れる子との心理劇」——北原歌子他である。

「遅れる子との心理劇」では、ダウン症児五名が、おかあさ

まがたの協力を得て参加し、聖心女子大学生(清水成子・明石道子)聖心インターナショナル・スクール学生(Gillian Holland, Mary Henneey 他)のリーダー・チーム、会議参加者全員の心理劇が展開した。(このリーダー・チームの主メンバーは、週一回、約三年間指導にあたったことがある)

一 目標

本研究は、集団保育に心理劇(行為法)の新しい技術をとり入れて実践した研究のひとつである。本研究の目的は、心理劇が「診断即治療」であるという原理に立ち、心理劇の有効性が、集団保育指導において、実証されることを目指している。児童の自発性・創造性・自立性を高め、集団保育によって、幼児期的人格形成と社会への適応性を深めることに、また本研究の目標がある。

二 方法

この心理劇では、私たちの生活を発展させていくために必要な対人関係の科学的認識の基礎を、三者関係の原理の把握にしている。そして「いま・ここで・新しく」という原理に立ち、教育治療係に即した三者関係の技法が主として展開される。

監督・補助自我・演者・観客・舞台の五つの機能的役割をとる参加者において、情緒的体験がたかまり、内的、外的認識が明確化される。この集団指導に必要な技法として、心理劇法（三者面談法、関係状況療法）を活用し、また活動過程が明瞭になり、思考が具体化され、表現されやすいウォーミング・アップの技法、人形治療法・役割明確化の技法・ダブリング（二重自我法）・ミラリング（鏡映法）・全員参加の心理劇の技法などを併用した。

三 遅れる子とのかかり方

昭和四十七年四月三日、「遅れる子との心理劇」が始められる前に、子どもとの出会い・かかり方について話された松村康平教授のことばを引用させていただく。

「今日は午前中、遅れているといわれる子どもと一緒にサイコドラマをします。普通、遅れてしまっているというふうに〈Retarded〉と書いてあります。ここでは、おくられている子とか、遅れてしまっている、とかのとらえ方ではなく、進む可能性をもちながらそこにいる、というとらえ方をしたいと思っています。

昨日、山松先生のビデオ・テープがありまして、そこでは、いわゆる自閉症といわれる子どものミュージック・セラピーが出ていました。ビデオにうつっているのをみている限りでは気づきにくい。それなのにおとながこれはこういう子どもときめてしまつて、子どもに接すると、その目で見てしまい、子どもの可能性を阻んでしまうことが多い。ほかのものと一緒に動いている姿を追つて、それを発展させていく。その時に、どこに問題が成立して、その問題をどう解決しながら、また先へ発展していけばよいか。このことは、誰においても共通な問題として成立するし、それをどう解決するかは、ちえがおくられているとか、精神薄弱児とか、そういう子どもだから、ということからではない。それなのに、まず、これはおくられている、これは自閉症だときめてしまつて、それにどう対処したらいいかとなると、もうそこで、対処する人が、人間としての子どもを、

自分において阻みながら、子どもに接していることになり、子ども自身の関係における展開可能性も阻んでいる。そのところをそうならないようにしようというのが、基本的立場としてある。

昨日のセッションでは、幼稚園の子どもたちがきて心理劇をしています。それを、こちらが見ているというのではなく、子どももここにいる人たちに見せるためではなく、ここで何を発見するか、幼稚園からバスでここへ来る間に何を発見したか、新しい行動をして、出てゆく時は、どういう成長をしているか、そういうとらえ方で見ていただきたいと思います。――後略――

なお、国際会議の終了後、保育指導を希望する人たちの集りがもたれて、四月十五日に実際の保育がはじめられるにあたって、述べられたことを抜粋してつけ加える。

「基本的な姿勢として、個性としてとらえること。世の中では、男とか女のちがいが、国のちがう人たち、グループのちがいが、どこかの学校と学校のちがいというように、ちがいをいっていいますが、もし違うことをはっきりというのなら、一人一人がみんな違う。ちがうことを徹底的にとらえることで、本当に人間を尊重することができる。徹底させること、そういう考え方が

基本に流れていると、変な子とか、かわった子どもとかいうようにとらえることができなくなる。一人一人、人間としての価値があり、変な子どもとか、ちえがおかれている子どもとかいうとらえ方、考え方が出て来ない。――中略――

子どもたちのせいでもないのにおとなたちが、こういう子どもたちと違って見ること自体まちがいがい。そういうまちがいをやらないこと。大切なことは、おかあさまやおとうさまや社会の人たちが、われわれとしては、どうしたらいいか、と思い、考え、それをする事しかない。そうすること、そのあり方にお互いに近づき、近づくように励ますこと。そして知能をのばすことにとらわれず、生活の充実を、関係の発展をもたらすこと。その子に働きかけてその子を変えようとしても、それでは関係がくずれもする。まわりのおとなが成長すること。おとなが思う子どものばし方をする、かえって子どもがくずれてしまったりする。国際会議では、子どもとおかあさまとまわりの人たちとで、一つの活動をした。そこで、多数の人の感動をよんだ。この子どもたちはおくられている子だという偏見をとりのぞくことが、世の中をよくする。感動をよんだのは、子どもが立派で、その子たちが世界の中で仕事をした、そういう意味でよかったな―と思っっている。報道者にも感謝の気持をもっていま

図 1

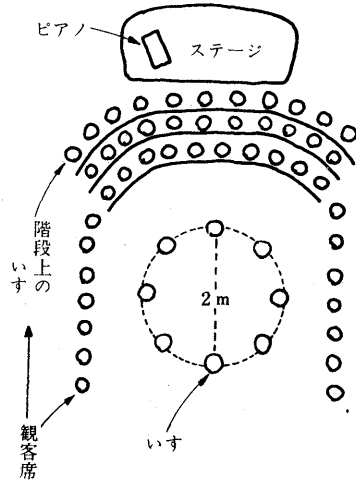
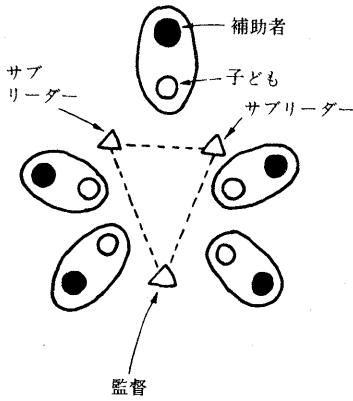


図 2



す。

さっき述べたような基本的な姿勢が一般化していないと、いろいろ障害が出てくると思います。少なくとも私たちの場合には、まわりが、何とおうと、一人一人皆ちがうんだ、子どものせいでもないし、親のせいでもない、せいだというなら、今、ここで、どう人間の活動として発展させていくか、そのことに参加して、つくり出そうとすることをしない人のせいである。

今後の方針として、心理劇との関係では、心理劇が役立つか役立たないかの批評をするのではなく、心理劇を役立つように育てていこうという態度をとること。人間の活動の一つとして心理劇的方法をとるのである」——後略——

四 活動の形態

(一) 劇化の準備——劇とはアクションを意味する。アクションは、演者の意識的、無意識的な防禦のわくをとりのぞき、活動が促進される。監督は、ここで、場面設定・場面構造化をはかる。場面設定に必要ないす八つが図のように用意される。

(二) 状況設定——集団行動のとりにくい、人と人とのコミュニケーションのつけにくい子どもたちとの活動の場の設定に関しては、心理的・身体的に気持ちよく参加できるような状況設定を

配慮する。子どもが、つつまれている、見守られている、話しかけ働きかける人がいると感じられるように。遊びのきっかけをつくる状況からは、ことばの出やすい状況へ、ことばが出やすくなった状況からは、ことばの出る状況へ、ことばの出た状況からは、人との関係が発展する状況設定へというプロセスが大切である。

(三)リーダー・チームの役割―主リーダーA、サブ・リーダーB・Cは、互いに自己の役割を明確にし、その役割の機能的分化をはかりながら、子どもとの関係で統合された活動をすすめる。

(四)場面展開―監督はウォーミング・アップの技法を用い、場面展開を用意する。ウォーミング・アップは劇化の準備であって、監督は、子どもの気持が自由にはたらか、緊張がとけるように、話しかけたり、独白をいったりする。ここでは「物媒介によるローリングの技法」を用いた。おとな集団で用いる技法のプロセスの段階を、子どもに即して変化し活用したものである。この技法により、ばらばらだった演者の集団への参加意識が、横とのつながりから生まれ、共通場面へのかかわり方が明確になる。「物媒介によるローリングの技法」は、松村康平教授が第三回国際心理劇会議（オーストリア・バーデン）の時に

発表されたもので、その後アメリカのモレノ・インスティテュートでも、松村技法として活用されている。この技法を子ども集団に用いると、「二つの物を、見えないあるものにみてる」とたとえば、「これはりんごです」「目に見えないものを頭にえがく、形象描出の能力を養う」（りんごが、バナナになり、指輪になり、犬になり、ピアノにもなる）。「物をまわすことにより、人と人との関係がつき、ことばが、人と物と自己との関係でやすくなる」（これはいなかのすいかです。どうぞ召し上ってください。どうもありがとう。おいしいわ。あなた、すいかすき？ ええ、大好き……）というように。また「役割をとっても、すすめられる」（おかあさんになって。子どもになって。動物になってください）のように。

★ウォーミング・アップの場面記録

指導者A 胸につけた名札をとって

「これはバナナです」

といって隣りの子どもに渡す。

「おとなりにバナナといって渡してください」といいながら、

子「これはバナナです」…一まわりする。

A「これはりんごです」…一まわりする。

A「これは…」

子「みかんです」

Aがつづける前に、子どもの一人が

「みかんです」という。

A「そう、みかんですね」

といってまわす。

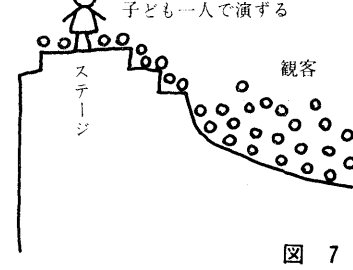
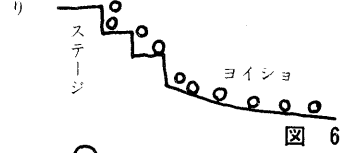
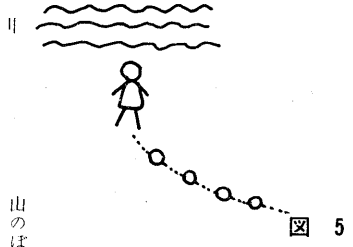
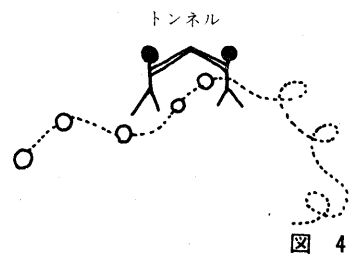
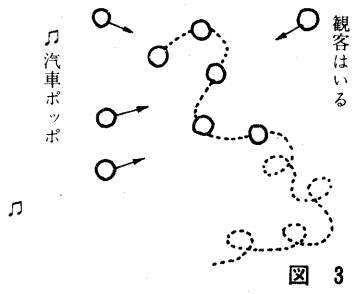
A「これはももです。どうぞ」

子「あー」（食べるまね）

A「おいしい？」

子「うん」

A「どうぞおとなりへまわしてください」



子「どうじょ」

指導者B「どこから買ってきましたか」

会話を始める。

子「デパート」

B「誰ときましたか」

子「ママと」

B「そう、みんなと食べてもいい？」

子「いいです」

B「どうもありがとう」

子「はい」というように、まわる。

B・Cのところで、会話が先にのびるように話しかけると、

ジュースになって飲んだり、アイスクリームを食べたり、みかんをむいたりするようすを始める。

指導者A「何を皆で食べたかな」

子どもたち、つきつきと、りんご、みかん、ジュースという（自由な会話、動作がはいり、いすから立って動きまわり始める子もいる）

こうして、五周する間に、子どもたちの自発的な動き、ことばが、物媒介によって容易になる。この技法は、特にことばの出にくい子どもたちには、集団のウォーミング・アップとしてたいへん効果がある。

(五)活動のプロセス・ウォーミング・アップのあとに、自己紹介の技法による歌と一緒の自己紹介。自己確立の技法により自己意識が明確になり、自分がするという気持が強く働くようになる。人形セラピーは、カップ人形を持ちながら、子どもが人形の補助自我になって、床の上に、「べんきょう」といいながら人形で、字を書き始める。(カップ人形)



「幼児の教育」第六十九卷第十二号(特殊幼児の保育技法)北原歌子 参照 監督は、集団の場の凝集が高まったと思われるころ、ピアノをひき、音楽を媒介にして、関係状況療法へ導

く。

★関係状況療法の場面記録(図 3、4、5、6、7)

監督は、ピアノを、その場の状況が展開しやすいよう、状況をみながら曲をえらんでひき始める。Bは、状況をつくる役割。Cは集団の補助自我になって、子どもたちが自発的にふるまいやすいよう、役割をとってふるまう。

ピアノ—自動車シユポシユポシユポシユポシユポシユポシユポシユポと、それぞれ思い思いにかけまわる。

指導者B「誰か運転手さんになってください」

「はい」手をあげる子ども。

指導者C「お客様は誰でしょう。早くおのりください」—観客席にむかって。

観客席から、たくさんの方がフロアに出てくる。

A「いすをなくして動きましょう」

動きがはいる… ①いまは山中… ②二人手をつないで、トンネルをつくる。子どもたちも参加者ものせた汽車は、トンネルをくぐる。一緒に動く参加者と一緒に、場面はどんどん変化する。活動の主体は子どもたちであり、参加者全員である。リーダーチームもその一員である。

場面は海になり、泳いだり、波になって、ザーザー、ワワ

一、シャブシャブと音を立てる。川になって、二人が長く横になつてねそべる。子どもたちは、本当にこわそうに、川を渡るのをためらう。『いやー』だめー。『さあ、山に行こう』場面は、へや一ぱいにひろがり、三階段をのぼり出す。『よいしよ、よいしよ』、皆が、かけ声をかけて階段をのぼつて、ステージの上に、場面はうつる。

「さあ、おべんとうにしよう」

「コーラーください」

「いくつ」

「みつつ」

指を出して子どもはかぞえる。監督は子どもたちに

「一人一人、おともだちを連れてきてください」という。

子どもたち、それぞれ観客の中に行つて、手をつないでくる。

ピアノのねむれ、ねむれ♪ 「ああ、くたびれた」全員ねむる状況。

セッションは、終りに近づく。始めてから四十五分の経過である。ダブルリング・ミラリングの技法によるゆうぎ指導の紹介、子ども一人一人の歌や、ピアノ（いすをピアノにみたて、弾くようす）を、皆の前で、しっかりと演ずる。自分が自分の意志で動き、ふるまう。最後に、全員の拍手をうけながら、手を振

つて子どもたちは退場する。

おわりに

この子どもたちの活動の記録と分析が、日常生活での子ども
の活動を発展させるヒントになる。子どもたちの行動から発見
されることは、物を見たてて遊べることである。物と人と自己
とのかかわりを、遊びのなかで、自然に発展させる。おとなも
子どもも、関係的存在である。関係の発展がおとなと子ども、
そのひとりひとりの発展をもたらし、それがまた関係の発展を
もたらすというような、関係弁証法的な存在のしかたをしてい
る。子どもは保護されなければ存在することはできない。しか
し、子どもとの密接な関係が発展すれば、その関係の変動をも
たらす子どもたちによって、おとなの存在のしかたにも、変動
がもたらされる。物との関係、人との関係、自己との関係の中
で、どういう技術が使われると、どういう傾向が生まれやすい
のだろうか。自己の展開、つまり、内的変化を外的なものの変
化において、可能とするためには、「状況の設定」が必要であ
る。この心理劇的な活動は、参加したおとなに驚きと深い感動
をもたらした。

（聖心女子大）